目　次

序――理由のないものに刻まれる生……1
I　収容の日……13
回春寮世話係……15
生木を裂くような別れでした……23
お父さんの後姿……30
私はカトリック……37
祭りの日に来るんです……42
なつかしい天神川、あの流れ……52
収容、逃走、投獄……62
おやじ巡査やった……76

ボロ買いの金さん……83
Ⅱ らいを病んだ母……101
歩きました、座りました、待ちました……103
私は鬼でした……127
きょうだいだけの日々……134
山の雑貨屋……142
お母さん……151
別れのぜんざい……161
Ⅲ 戦争とらい……171
四つの舟……173
患者が殴られてるんです……186
私はもぐらです……191

白い手袋……201
自由地区……212

Ⅳ　島での生活……223
腹巻きの中の米……225
野菊など供花とし墓を去りにけり……241
赤いウサギの目……254
一枚の写真……260
醜うなって……266
青春の日々……272

Ⅴ　発電所のある村――らいを病んだ故郷の人たち……285
地図の上の故郷……287
らい園で今は郵便配達婦……291

小さな洋裁店の思い出……296
今さららいを嘆いてみても……302
発電所のある村……306
聞き書きを終えて……317
らい者は今日も故郷を想う――一九九一年……326
続く故郷の拒絶――二〇〇一年……334
終焉期に聞こえる声……338
――二〇一七年、ハンセン病療養所入所者へのアンケートハガキから
隔離の中の医療……355
あとがき――ベクトル2について……393
解　説……宮坂道夫……397

序――理由のないものに刻まれる生

たいていぼくは、朝の五時半に起きた。その日もそうだった。そして、鳥取を六時に出た。

秋の朝の六時は、うす暗い。市民病院の前を通り、国道五十三号線を走り、郊外に出た。車はまばらだ。農作業の軽トラックが農道へ曲がっていく。色づいた稲穂が一面に見渡せる円通寺あたりの川の流れはゆるやかだ。

一時間半走ると峠にさしかかった。昔の志戸坂トンネルは古い校舎の廊下のように真っ暗で、ところどころに高い電灯がともっていた。いかにも県境を越えるという感じがする。大学浪人のころ、京都から神戸を回って、自転車でこのトンネルを越えて帰ってきた。

トンネルを出ると急な下り坂があって、山陰に比べて広く明るい農村地帯が続く。ところどころに店の並ぶ町があり、車は佐用、上月、上郡と通って国道二号線にぶつかった。

洪水のようにトラックが走っていた。レンガ工場が目につく。ブルーハイウェイが瀬戸

内海の上を走る。カキ棚が浮かんでいる。日本海と違って、おだやかな海だ。虫明に着くと、狭い道の両側に家が混み合って並んでいた。そこに小さな港があって、フェリーを待つ業者の車が列をなしていた。海の近くにそびえる山の上空をトンビが飛び、海辺は桟橋の取り付け工事で、いつもよりは賑わっていた。たくさんのクラゲが、大小さまざまに傘を広げたり閉じたりしていた。三十分以上も遅れたフェリーが着いて、業者の車がひしめくように並び、ぼくは二階の操縦室に押し上げられた。「繁盛して、忙しそうですね」とぼくは言い、「まあな。工事中のときだけはな。今年の七月で住宅や治療棟の工事もしまいだしな。それまでが忙しいくらいなもんで。それにしても久しぶりだな。どないしとった。去年の冬は顔見なんだな」と五十歳の船長は言う。

もう十五年も前のことになる。ぼくは初めて日生(ひなせ)港からポンポン船に乗って、この国立療養所、長島愛生園に来た。ポンポン船はフェリーと違って、瀬戸内海の波をかきわけて長島に上陸するという感じがあった。そのときによく乗ったポンポン船「森丸」の船長が、このフェリーの船長のおやじさんだった。

「元気ですか」

「ああ、元気にしとる。今年で七十五かな。家でぶらぶらしとるわ」

「森丸」船長は人のいいおじいさんだった。ぼくらは、奈良や京都や大阪から多くの仲

間とたびたび愛生園に行ったりしていたから、「森丸」の船長とは顔なじみだった。船長は患者さんたちにも親切だった。

もう一度ぼくは計算してみた。確かに十五年が、あれから経っている。船がポンポン船からフェリーに変わり、船長が二代目になっていてもおかしくないだけの月日が、経ってしまっているのだ。

幼なくて　癩病むいわれ問いつめて
母を泣かせし　夜の天の川

高校時代の授業で、この短歌を国語の教師が紹介した。

「祭りかなんかあったんでしょうね。笛の音が遠くに聞こえ、友だちがお母さんやお父さんと楽しそうにしている声が聞こえるんでしょう。「なあ、お母ちゃん。どうしてぼくだけが祭りに行ったらいけんだ。なあ、なあ」って言ってるんでしょうね」と教師がその歌を説明し、教室はシーンとなり、ぼくの頬に寒いぼがでたのを覚えている。このとき初めて、強い印象で「らい」という言葉を聞いた。

大学生になって、ぼくは京都に下宿していた。同じ下宿に、大学にもほとんど行かず、下宿にもほとんどおらず、日曜日の夕方に下宿に帰ってきて真っ赤な小便を水洗便所に残

し、バッタンと倒れるようにして眠っては、日曜日にまたどこかへ出かける先輩がいた。ある日ぼくは、その人がやっているサークルに顔を出した。フレンズ・インターナショナル・ワークキャンプ(FIWC)関西委員会といい、自分たちの肉体労働で、らい回復者社会復帰センター〝交流(むすび)の家〟を奈良に建設していた。そしてそのサークルでのかかわりを通して、ぼくは生まれて初めてらい療養所を訪ねた。昭和四十三年の秋のことだった。

らい者が受けてきた差別のことを直接に聞き、らい者が身に刻んだ変形を初めて見た。そして何よりぼくの心を奪ったのは、ぼくと故郷を同じくする人たちが、大勢この島に住んでいるという事実だった。

ぼくは山陰線を走る夜行列車に乗って、下宿している京都から鳥取へ帰省していくのが好きだった。列車の一番後ろに新聞紙を敷いて、飛ぶように去ってゆく夜の景色を眺めながら、故郷が近づいてくるのを楽しんでいた。しかし、ぼくが心楽しい旅を故郷に向かってしているのとは全く反対の方向に、故郷から収容所へと列車に乗せられ、悲しい旅を強いられた人たちがいるのだということを知ると、体の中を戦慄が走るのを覚えた。

ぼくの好きな故郷というのは、例えばらい者を、故郷から放り出すということで快い故郷であったのか、と思った。多数の幸福のために少数に犠牲を強制し、それによって故郷が平和であったのか、と思った。そんな故郷も、そんな平和もいらない。ぼくにとって故

郷はさまざまな問題を解決するだけの力を持ち、さまざまな問題をかかえた少数の人たちにとってもいい所であり、共に暮らしあえる所であって欲しいと思った。

ぼくの故郷でらいをわずらった人たちは、どんな仕打ちを受けてきたのか、ぼくの故郷は、そこでらいをわずらった人たちに対して何をしてきたのか、その事実を知りたいと思った。そう思ってぼくは、ぼくと故郷を同じくするらい者の人たちを訪ね歩きはじめた。昭和四十七年に、初めて故郷を同じくする人から聞き書きをした。

らいは、ぼくの故郷でも、人間の信頼や人間の愛情を壊した。夫婦を離婚させ、親子を離別させ、家庭を崩壊させ、町や村に共に住むことを許さなかった。いや、らいがそうさせたのではなかった。政治や権力が、またその結果、共に住む人たちが、らいをそういう病気に仕立てあげてしまった。故郷の人たちも決して、「治ったら帰ってこいよ」とは言わなかった。それどころか、こぞって、らいを病んできた人たちだけを責め続けてきた。そのことは、今も変わることなく続いている。四十人の故郷を同じくするらいを病んだ人たちの聞き書きをして、そう思った。

そしてこの日、ぼくは最後の人を訪ねて島に来た。

長島愛生園は気温は少し下がっていたが、良い天気で小豆島がはっきりと見えた。きれ

いな建物にかわった看護学校の回りには、寄贈されたバラが咲き乱れていた。矢車草、ヒナゲシ、マーガレット、シャクヤク、カスミソウ。青に赤に白にピンク。園内のあらゆる所にきれいな花が咲いていた。

ぼくはKさんに案内されて、万霊山の納骨堂へ行った。満天星(どうだんつつじ)が花をつけて、お参りする人々を迎えているようだった。瀬戸内海が見え、その向こうに本土が見えた。Kさんは「白内障がすすんで見えんようになってきちゃいましてね」と言いながら、どうにかロウソクに火をともし、線香をたいてくれた。

初めて納骨堂の中を見た。三畳くらいの広さだ。手のひらに乗る小さな骨つぼが、博物館のように陳列されている。昭和六年から年代ごとに整頓されている。昭和十九年、二十年、二十一年の三年間の所にはおびただしい数の骨つぼが並んでいる。名前の分からなくなった骨つぼ、死亡年月日が不明な骨つぼ、病者の家族で、故郷でではなくこの園で死亡した人の骨つぼなどがあった。取りに来るという家族からの連絡がありながら、結局は誰も受け取りにこないままになっているやや大きな骨つぼは、別に安置されてあった。

昭和五十六年の棚には二十六個の骨つぼがあり、昭和五十七年の棚には五月現在で十一個あった。昭和五十七年の六番目に、吉田敬太郎と書いた骨つぼがあった。吉田敬太郎、ぼくはこの人を訪ねて来たのだった。

敬太郎じいさんに会ったのは二年前だった。愛生園にある精神科病棟、五病棟にじいさんは入院していた。「あまり話はできないですよ」とKさんに教えてもらい、病室に案内された。敬太郎じいさんは寝たきりのようだった。「ああ、どうも。そりゃごくろうさんですなあ」とじいさんはしゃべった。それだけだったから、詳しい話は何も聞くことはできなかった。ただ、ぼくの生まれ育った田舎ととても近い村に暮らしていたということで、ぼくは敬太郎じいさんのことを忘れなかった。敬太郎じいさんは、あの五病棟から万霊山納骨堂にこうして転室してきたのだな、と思った。

じいさんは天理教の信者であった。ぼくが初めて長島愛生園に来たときに泊めてもらったのが天理教会の一室だった。そのときの教会の管理者の生田さんはもう亡くなり、今は別の方が管理されていた。なつかしい天理教会に、吉田敬太郎さんを知っている人たちが集まっていた。

――昭和二十七年だったね。娘さんに手をとられて入所してきたよ。そのときにもう目は見えなかった。来てからすぐ、弟さんが奥さんと結婚されたんだよな。そりゃあもう、えらい怒って、手がつけられんかったよ。おれに相談もせずにだって。わしなんか、もう怒られに行くようなものだったよ。

娘さんが高校生のころかな、夏休みに来て、一週間くらい泊って、手をひいて園内を連

れて歩いておって、みんなうらやましく思ったことあったね。息子さんが同じ病気で入って来たね。ざっくばらんな人でしたよ。盲人の女の人の所に行っては、お互いの打ちあけ話をされたりしとったね。

昭和五十四年の四月でしたね。本人がどこまで本気で言っとるのかつかめなかったけど、よく物がないない、って言うんですよ。やたらにベルを押して補導員を呼ぶし、一度トイレで大便を失敗して、みんな盲人だからそれを踏んで大変なことになったことあったね。夜大きな声を出して叫び声をあげるって、それで五病棟に回されたんだよな。

でも頭がおかしかったんじゃないよな。ラジオで相撲や野球を楽しんで聞いて、高校野球で鳥取代表がでると、そりゃあ喜んで応援してましたよ。目は見えん、奥さんは弟と結婚する、娘も嫁に行って来てくれなくなった。息子はよその療養所へ出て行ったでしょ。里帰りはしてくれるな、親しくしていた女の人は死ぬ。いろんなことが重なったんだよな。それで、ちょっとしたことで看護婦や補導員を呼んでは、いかりちらして迷惑がられるようになったんだと思うね。

昭和五十四年の十二月に危篤になって、娘さんが来たでしょ。あれから毎週月曜日に来てあげとったわな。子どもができて、まだ小さかったから、幼児感染ということを考えて来なかった、って旦那さんが言っとったね。ようできた旦那でね。今度も、三月になって

急性肺炎で危篤になって、田舎から娘さんがやってきて、二日間つきっきりの看病して死を看取ったもんな。この病気で家族に看取ってもらえるなんて、例外中の例外。ほんと幸せ者ですよ。娘さんの旦那が故郷に帰って園での葬式に誰か出る者はないかって、車を走らせたけど、弟も奥さんも誰も来なかったよな。ま、それがあたり前だけどね。旦那さん、結局、空で園にもどってきたね。でも、敬太郎じいさんの場合は、あの娘さん、それにその旦那さんがいたということで、幸せ者だったんじゃないかな――

皆は自分が知っている吉田敬太郎のことを少しずつ話し、まとめるとこのようなことだった。話は敬太郎じいさんと直接は関係のないことに発展していった。

Ｉさんは自分から籍をぬき、家とのつながりを断ってきたものの、里帰りするたびに、自分の育った家を見てはホッとしていたという。

「あるとき、家の前を通ってみたら、家がなくなってるんだよ。何回も見てみたけどないんだ。これで完全に自分の方から連絡はとれんわけだよな。自分から籍はぬいたというものの、いざというときは家があると思っていたその家がもうないんだからな。愕然としたな」

Ｊさんは、「わしなんかもう、ひとりでこの島で死んでよ、それでしまいよ。もう誰も墓参りも何にもしてくれんで、それでええよ。そんなこと、とっくに諦めてるもんな」

するとQさんが、「そうはいっても、この島でいっしょに暮らしてきただろう。家族以上に長い時間をいっしょに暮らしてきたんだよ、Jさん。だから、たとえJさんが死んでも、放っておくなんてことはしないよ。家から捨てられてはいても、それ以上のつきあいというもの、お互いにしてきたんじゃないか。負け惜しみじゃないよ。みんな放っときゃしないよ」

ぼくは、このQさんの言葉に感動した。それから皆は、また吉田敬太郎さんの思い出をあれこれと語った。敬太郎じいさんはそういうふうにして生き、そういうふうにして死に、そういうふうにして葬られ、長島愛生園入所患者、二千八百二十七番目の死者として、小さな骨つぼの中に今はおさまっていた。

天理教会を出て、Kさんと明るい午後の園内を歩いた。故郷の人たちに、舎の縁側で会った。会って話していると、その人たちが前に話してくれたことが思い出された。

ぼくは、群馬県草津楽泉園、静岡県駿河療養所、岡山県長島愛生園、同邑久光明園、熊本県菊池恵楓園、以上の療養所に住む、ぼくと故郷を同じくする人たちを訪ね、その人たちの話されたことを記録した。故郷から連れ去られた多くのらい者はすでに死亡し、あるいは自殺し、その人たちの悲しみや苦しみ、怒りは聞くことができなかった。「会いたく